

書評 Book Reviews

□吉田外司夫：青いケシ大図鑑 Toshio YOSHIDA:
Pictorial Guide to *Meconopsis*. A4 変型判.
 296 pp. 2021. 平凡社. ¥12,000円+税. ISBN978-
 4-582-54265-3.

ヨーロッパでは近代王政期の衰退とともにそれまで主流であった幾何学様式によった庭園は廃れ、とくにイギリスで登場したのが、多数の樹木を森林のように植栽し、樹下を含め多様な植物を植栽し、観賞に供する林地園芸であった。低木ではシャクナゲ類、草本ではサクラソウ属など種多様性の高い属にとくに関心が集まり、やがてメコノプシスにも及んだ。

本書を通覧し、メコノプシス属の研究は初めイギリスを中心に推進され、1960年代までは、ヒマラヤは王立キュー植物園、中国奥地は王立エディンバラ植物園が主力になってきたことが判り面白い。

著者の吉田さんは、あとがきに、「私は植物写真家です。1984年以降、生物多様性のホットスポットとして知られるシノヒマラヤの植物に魅せられて足しげく通うようになり、最近ではシノヒマラヤを象徴するケシ科メコノプシス属植物の撮影に集中してきました。その私がメコノプシスの新種を自ら論文で発表するようになったのは、自分の中では自然な流れでした。」と書いている。

自然の流れかどうかには異論もあるだろうが、本書を通覧すると著者がそう記したことが納得される。メコノプシス属は1回または多回結実性の草本で、木質化せず、分枝もまれで、殆どに有色の毛が密生している。花は基本4数性、放射相称で、受精後蒴果を結ぶ。基本構造の部分での多様性が低い。また、それだけでなく、器官毎の多様性もそう大きなものではないが、開花期から結実期にかけて変化が著しい。そのため、各種の形状の変化を熟知しないと分類上の位置づけを誤ることが多いことが納得できる。何度も自生地を訪れ観察・撮影を繰り返した成果が本書を産んだといつてよい。どの写真も種の特徴をよく捉える。世界のメコノプシス愛好家にとって座右の書となること請け合いである。

しかし、最初に著者自ら「写真家」と断っている以上、分類体系への考察とか、類似種との相違、本書で認めた種を特徴づけた形質の妥当性、雑種と



推定する根拠などに触れずとも許されるのだろうか。しかも、著者自らも分類学者としても責任の重い命名もやってのけた以上、写真家ですの一言で批判をやり過ぎそうとするのはいかがなものかと私は思う。とくに自らが新種記載に関わった種についてなぜ別種としたのか、また雑種とみたのかその根拠と考察を丁寧に述べて欲しいと思った。

〔付記〕だが、それは出来ない期待となった。かねてから病氣療養中であった著者の吉田外司夫さんは、本年（2021年）4月11日に亡くなられた。彼との最初の出会いはカトマンズだった。出版社勤務で山岳の撮影をされていたが、植物の撮影に関心を抱いているとのことだった。

後に研究室で写真撮影へのアドバイスを求められ、撮影した植物を採取することを薦めた。しかし、彼の撮影は単独行で、大がかりな採集はむずかしく、勧めたのは携行に便利な雑誌に挟める程度の採取だった。初めはその標本同定を求められたが、私自身にも時間がなく、後回しにしてしまうことが多かった。

多分、痺れを切らしたのだろう。吉田さんは自身で同定を試みるようになり、次第に腕を上げていった。と同時に、彼の写真のレベルが格段に上がったのだ。画面に種の同定上重要な形質を可能な限り写し込んだ結果である。かつての亘理俊次先生のように、吉田さんは植物写真家へと成長されていったのだ。その早い病没は惜しまれてならない。

（大場秀章 Hideaki OHBA）